小さな種からの芽生え

――荒神衣美編『多層化するベトナム社会』研究双書 No.633、アジア経済研究所、2018 年 2 月――

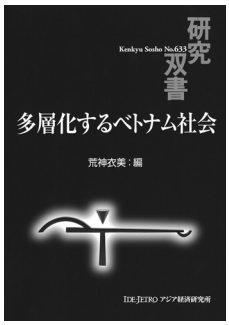
荒神　衣美

2000 年代ベトナムの高度経済成長は、統計的にみると格差拡大をほとんどともなっていない。格差の指標とされるジニ係数は 1990 年代半ば以降、低い水準を保ち続けている。ところが、昨今ベトナムの人々の間では、不平等に対する関心が高まっているといわれる。実際、山岳地に住む少数民族が依然として貧しい生活を送っている一方で、都市部では世界的に億万長者と称されるレベルの富裕層が出てきていたりもする。ベトナムにおける格差は、実は統計が示す以上に拡大しているのではないか。そうだとすると、格差はどのような形であらわれているのか。出世の機会は出自や政治的コネクションとは関係なく、誰にでも公平に開かれているのだろうか。

本書はこのような問題意識から出発した研究会の最終成果である。議論にあたって、本書は「社会階層」という枠組みを用いている。社会階層研究では、不平等・格差の構造や特徴を、所得や資産といった経済的資本だけでなく、文化的資本（学歴）や政治的資本（コネクションや社会的地位）、また権力や威信などから多元的にとらえる。階層は一般的に職業によって分類され、各資本の分配状況や威信の大きさなどから序列付けされた職業階層の間で人々がどのように移動しているかをみることで、社会の流動性を測ろうとする。大規模社会調査が進んでいる国では、データを用いて社会全体の動きを分析することが可能だが、ベトナムではそうしたデータが十分に整備されているとは言えない。そこで本書では、どのような人々がどういった条件の下で上層に台頭しているのか／下層に留まっているのか、という点を質的に解明することで、社会の開放性について議論してみることにした。具体的には、上層に位置づけられる職業層（指導層、企業経営者、高度専門技術職）と中下層から下層に位置づけられる職業層（農村自営業者、農民、労働者）の形成過程や特徴について、各章でケーススタディーや独自に構築したデータなどを用いて分析を行っている。

本書およびその元となった研究会の問題関心は、実は筆者がベトナム滞在中に感じた非常に個人的な疑問からきている。筆者は 2010 年から 2012 年の 2 年間、ベトナム・ホーチミン市に海外派遣員として滞在していた。その際、日々の家事をひとりの女性に助けてもらっていた。彼女は掃除や料理の合間をぬって、家族の話や近所の話、昨日のニュースの感想に至るまで、彼女の周りの様々な出来事について、毎日毎日それはよくしゃべった。この、言ってみればおばさんの世間話から得た情報が、いつしか私のベトナム社会に対する理解の礎となっていった。

彼女には 2 人の息子がいたが、小学校中学



http://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Books/Sousho/633.html

年に在籍していた長男のフーは、学年でもトップクラスの優等生だった。学期末には必ずといっていいほど成績優秀者に贈られるご褒美（遊園地の無料招待券など）をもらってきていたほどである。そんなフーの夢について話を聞く機会があった。当時フーが描いていた未来図は「留学し、世界を飛び回る仕事に就いて、金持ちになる」というものだった。そのとき私のなかに生じた次のような疑問が、研究会の立ち上げ、そして本書の出版へとつながることになった。フーはとても勤勉で優秀だが、家は決して裕福とはいえず、日雇い労働者の父親と家事手伝い業の母親に何か特別なコネがあるとも思えない。ベトナム社会において、こうしたおおよそ下層に位置づけられる出自の若者に、留学したり何らかのエリート職に就いたりする機会は開かれているのだろうか。

本書の結論に鑑みるなら、フーのような下層出身者でもある程度のところまでの出世は可能と考えられる。2000年以降のベトナム社会では、教育・就業機会の多様化によって、努力・能力次第で企業家や高度専門家になる道が開けた。また、中・下層の間はかなり流動的で、たとえ職業的には下層であったとしても、様々な職を兼業するなどして十分な経済的豊かさを享受する機会も存在している。しかし、どこまででも上昇移動できるかというと、そうではなさそうだ。現代ベトナム社会では上層のなかに分断が生じつつあり、国家セクターとの関わりのなかで形成された最上層に参入するには、努力や能力ではどうにもならない壁がある。もしフーが最上層まで出世しようとするなら、いずれそうした壁に直面することになるのだろう。

筆者の個人的かつ小さな疑問から始まった本書は、筆者にとって初めての編著であり、研究会の立ち上げから本の出版まで、何一つすんなりいったことはなかった。異なる筆者が描く異なるテーマの論考を一つの道筋をつけてまとめるという編者の仕事は、想像していた以上に困難なものだった。各論での主張をどうやったらもう一段大きな「本としての」主張に昇華させることができるか、その過程で各論の主張を曲げてしまってはいないか…。作業を進めるなかで、編著を作ろうとしたことを何度後悔したか分からない。とはいえ、そうした作業は、関心・知識の限られる一研究者では成しえない議論の広がりを生みうる。各論がより大きな議論に結びついていく過程に楽しさを見いだしたこともまた事実である。普段は農村のミクロな経済事象を扱ってばかりの筆者がベトナム社会について分析するなどという身の程知らずなことをやってしまえたのは、これが編著だったからゆえなのである。研究会メンバーの多大なサポートのもと、筆者がベトナム滞在中に見つけた小さな種は1冊の研究書として芽生えた。本書の議論がベトナム社会への理解を深めることに少しでも貢献できていれば、また新たな研究が花開くきっかけになればと願っている。

（こうじん　えみ／アジア経済研究所　地域研究センター）